

参考資料
分類名〔水稻〕

参 2	水稻品種「金のいぶき」の栽培法（追補）
-----	---------------------

宮城県古川農業試験場

要約

「金のいぶき」は、慣行施肥に追加で穂揃期に窒素成分 1 kgN/10a 施用することで、倒伏程度は増加せず、登熟後半まで葉色が維持され、登熟歩合が向上し、精玄米重が増加する。

普及対象：「金のいぶき」栽培に取り組む経営体
普及想定地域：県内全域

1 取り上げた理由

平成 27 年度に本県の優良品種に採用された「金のいぶき」は、収量が安定しないことから、慣行施肥に穂揃期追肥を追加した施肥体系について再検討したところ、葉色の維持と登熟歩合の向上により、収量が増加したため、参考資料とする。

2 参考資料

- (1) 慣行施肥に、追加で穂揃期に窒素成分 1 kgN/10a を施用することで、穂揃期から出穂後 25 日にかけて窒素栄養濃度が維持され、葉色の低下が抑えられる（図 1）。
- (2) 穂揃期の追肥により、登熟歩合は上昇する。また、千粒重も増加するため、精玄米重は増加する傾向がみられ、倒伏程度は増加しなかった（図 2、表 2）。

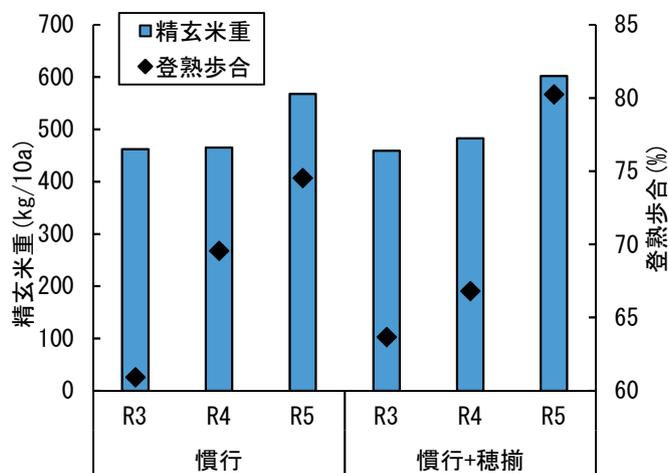
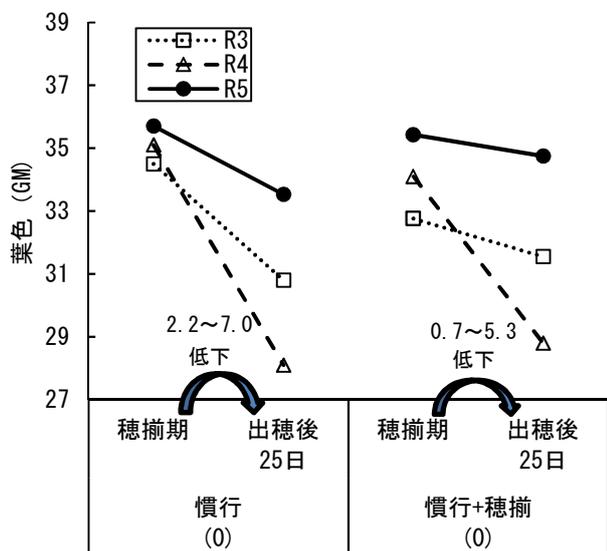


図 2 年次別の精玄米重と登熟歩合

図 1 穂揃期及び出穂後25日の葉色

- 注 1) グラフの () 内の数値は、倒伏程度（無倒伏 0 ~ 全倒伏 400）を示す。
2) 穂揃期から出穂後 25 日にかけての葉色の低下程度を、グラフ内に示す。

3 利活用の留意点

- (1) 3 か年（令和 3 ~ 5 年）の施肥試験を、古川農業試験場内で、表 1 で示す施用量で実施した。土壌タイプは、灰色低地土で実施した。
- (2) 安定した生育を確保するため、栽培マニュアルに準ずる。

- (3) 特に、目標穂数 460～510 本/m²を確保することが重要であり、過繁茂する場合を除き、移植時期は5月上～中旬を目安に、栽植密度は 60 株/坪 (18.5 株/m²)、基肥量は「ひとめぼれ」と同程度の窒素成分で 5 kgN/10 a を基本とする。また、生育後半の稲体の健全性を維持するため、有機物や土づくり肥料の施用により土づくりを行う。
- (4) 葉色は、「ひとめぼれ」に比べ淡く推移し、幼穂形成期から減数分裂期にかけて、著しく低下するため、減数分裂期の葉色値 (SPAD502 値) が 30 以下にならないよう、幼穂形成期の目標生育量以内であれば、幼穂形成期に窒素成分量で 1 kgN/10 a 程度施用し、減数分裂期の葉色値を 30～32 程度に維持する。
- (5) 穂揃期の追肥により、玄米タンパク質はやや増加する (表 2)。

(問い合わせ先：宮城県古川農業試験場 作物栽培部 電話 0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究の概要

- (1) 試験研究課題名及び研究期間
 - イ 実需対応型新みやぎ米の安定生産技術の確立 (令和 3～5 年度)
- (2) 参考データ

表 1 場内試験の施肥体系 (令和 3～5 年)

試験区	施用時期及びN施用量 (kgN/10a)			
	基肥	幼形期	減分期	穂揃期
慣行	5	1	1	-
慣行+穂揃	5	1	1	1

- 注1) 基肥は、塩加磷安284号 (N:P:K=12:18:14) を使用。
- 2) 追肥は、NK化成68 (N:P:K=16:0:18) を使用。
- 3) 「慣行」と「慣行+穂揃」で使用したほ場は、令和 3、4 年は別ほ場で、令和 5 年は同一ほ場内で実施した。

表 2 収量構成要素及び玄米タンパク質含有率

年度	試験区	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒/穂)	m ² 粒数 (百粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	玄米タンパク質含有率 (%)
R3		462	464	73.9	343	60.9	22.1	6.4
R4	慣行	465	459	63.9	293	69.5	22.8	-
R5		568	461	74.8	335	74.5	22.1	7.0
R3		459	506	63.4	320	63.7	22.5	6.7
R4	慣行+穂揃期	483	457	69.4	317	66.8	22.8	-
R5		602	449	73.2	330	80.2	22.8	7.3

- 注 1) ふるい目 1.85mm 以上を使用。
- 2) 玄米タンパク質含有率は、玄米水分 15% 換算の値。

- (3) 発表論文等
 - イ 関連する普及に移す技術
 - (イ) 水稻品種「金のいぶき」の栽培法 (第 95 号普及技術)
 - ロ その他 なし
- (4) 共同研究機関 なし